

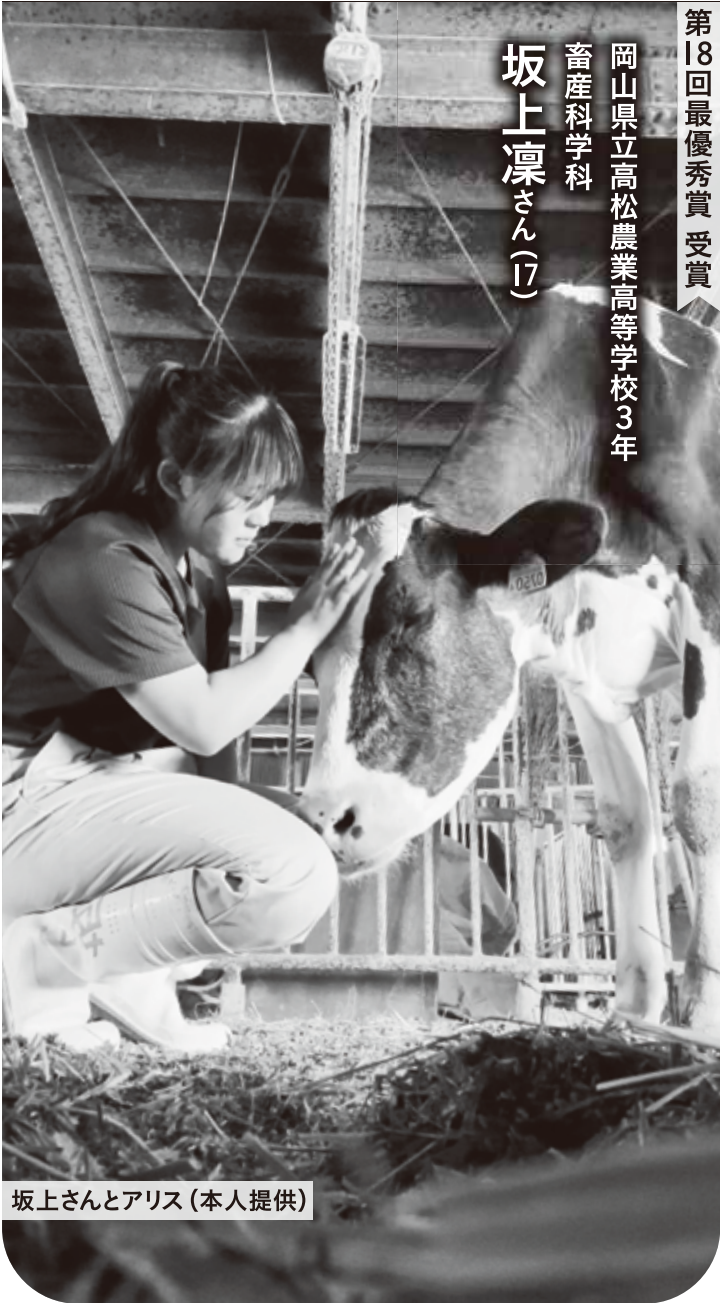
牛乳の日……
6月は生乳生産量が年間の中でも多くなる時期。2001年、国連食糧農業機関（FAO）は、牛乳への関心を高め、酪農家・乳業の仕事、大切さを多くの人に知ってもらうことを目的に、6月1日を「世界牛乳の日 ワールドミルクデー」、6月を「牛乳月間」としました。

企画・制作 / 日本農業新聞 メディアプロモーション部

牛乳の白

特集号

あす6月1日は
牛乳の日!



岡山県立高松農業高等学校3年
畜産科学科
坂上凜さん(17)



高松農業高校畜産科学科の仲間たちと

第18回最優秀賞受賞

昨年は運に恵まれ、さまざまな賞を受賞しました。4月のセントラルジャパンホルスタインショウでは、リードマンコンテストで高校2年生以下の部で最優秀賞を獲得、家畜審査競技会肉用牛の部でも入賞し、最後にこの『酪農の夢』コンクールで最優秀賞を受賞できました。

牛が幸せな酪農経営を

小学校6年のときから進学を希望していた高松農業高校に実際に入学してみると、実習がとても楽しく、牛について多くのことを学べました。しかし、実際に畜産を学ぶ中で現実を突きつけられ経済的な厳しさも実感しました。牛

は可愛いだけではなく、経済動物としての現実も理解しなければなりません。受賞した「アリスからの贈り物」は、牛と向き合う上での原点となりました。アリスという牛に特別な可愛さを感じていましたが、ある日突然、元気をなくし乳量も低下、次週には入院。治療しても赤字になるため、「殺

さなければならぬ」という現実に直面し、ショックを受けました。その体験から、「生まれてから最期まで、牛がストレスなく、幸せに過ごせる環境」を作ることを目指し、牛たち中心の酪農を目指すことに決めました。

酪農家を志し踏み出す

現実を見て不安もあります

が、牛から学んだことは大きく、酪農家になりたい気持ちちは強いです。酪農家の皆さんへは、心から「ありがとうございます」と伝えたいです。厳しい状況の中で生乳生産を続けてくださり、酪農家を目指す若い私たちにかっこいい背中を見せてくれて心から感謝しています。

酪農家になりたい

JA全農学生『酪農の夢』コンクール

JA全農が開催するJA全農学生『酪農の夢』コンクール。将来の日本の酪農を担う学生・生徒から、『酪農の夢』をテーマに作文を募集し今年で19回目の開催を迎える。挫折や喪失を乗り越え、「こんな酪農家になりたい」という決意と希望を語った過去の入賞者に話を聞いた。

JA全農学生「酪農の夢」コンクール

過去の受賞作品は
こちらから



第19回コンクールの作文も募集中。
応募締切は9月9日(火)まで。

栃木県那須塩原市で酪農経営を営む長谷川牧場に親元就農し、今年4月で3年目になります。『酪農の夢』コンクールへは、栃木県農業大学校2年の時に先生の勧めで応募し、その年の最優秀賞に選ばれました。

あきらめられなかった夢

僕自身が酪農に取り組ま

での半生を書きました。幼少期から牛舎で過ごし、自然と酪農を継ぎたいと思うようになります。『酪農の夢』コンクールへは、第1志望の農業高校に入らず、進学した別な高校は2年で中退。でも、酪農への夢をあきらめきれず、高等学校卒業程度認定試験に挑戦し合格しました。栃木県農業大学校に進学し、牛舎

管理や酪農ヘルパーに取り組み、スマート農業を体験。理想の酪農は「牛に優しく、人が楽しい『楽農』」経営で、牛舎の拡大や労働時間の軽減を目指します。一方、飼料価格の高騰に不安を感じつつ、地域の酪農家と協力して理想を実現したい——という内容でした。

夢を見て前に進む

酪農ヘルパーの作業の時には、良い経営者の技術を見てきました。さっそく実家の牧場で給餌内容を変えたと乳量もどんどん良くなり、この1年で1日の平均乳量が22キロから32キロになりました。2年目には父は僕に好きにやれ

と、餌は任せられました。今、作文を書いた当時の自分に言葉かけながら、夢を見過ぎていたおかげでこんな前向きでいられるのだから、それはそれでよかった。趣味の車に例えるなら、僕にはバックギアはないから後戻りはできない。前に進むしかないぞ——そう言いたいです。



長谷川豪輝さん(左)と妻のゆいさん。
栃木県農業大学校在学時に知り合い、卒業後に交際を始め2024年に入籍



理想の「楽農」経営を目指す豪輝さん